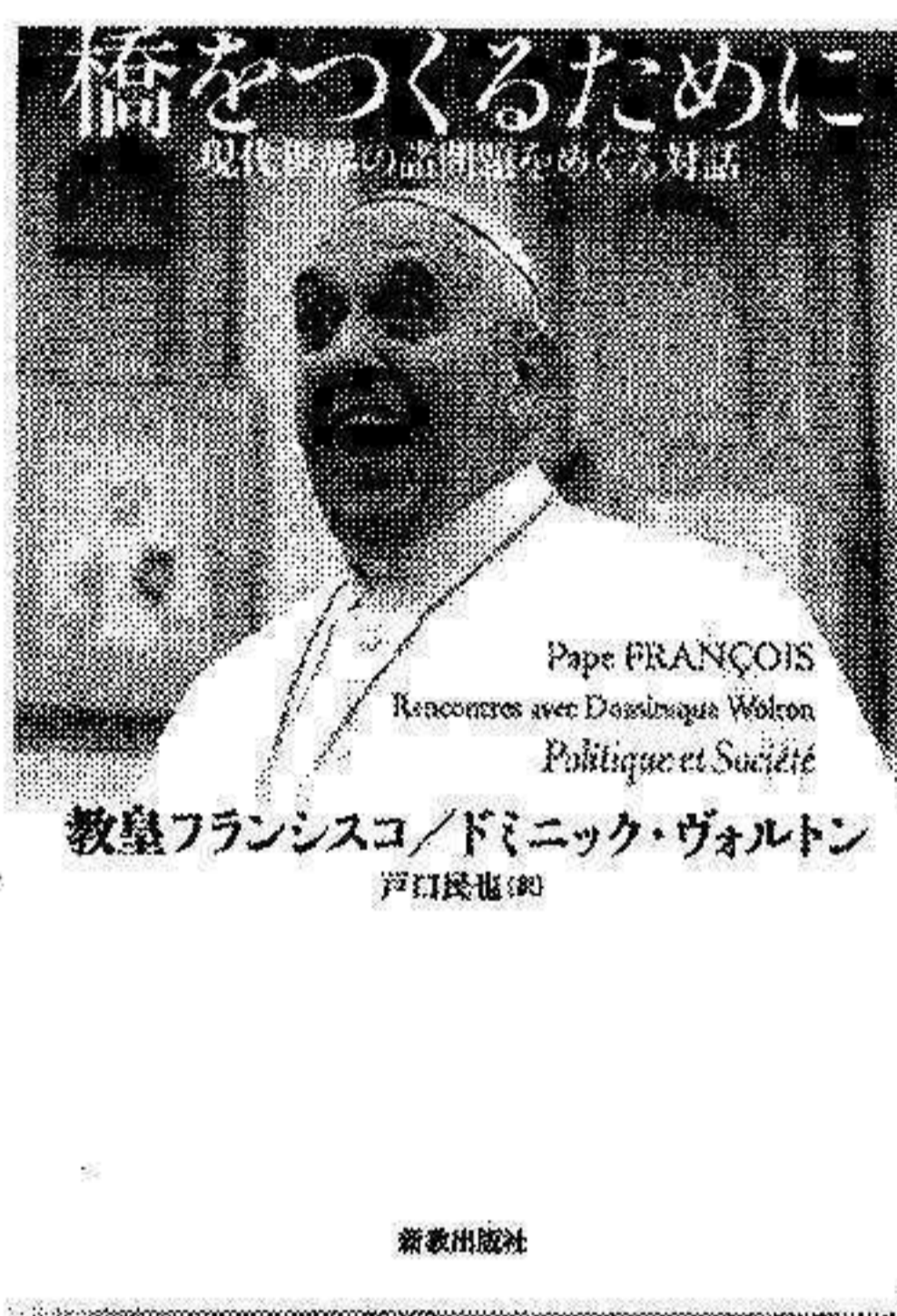


グローバリゼーションの中の ローマ教皇

〈評者〉山岡三治



橋をつくるために
現代世界の諸問題をめぐる対話
教皇フランシスコ/ドミニック・ヴォルトン著
戸口民也訳

グローバル化の時代のはじめての教皇 本書で教皇と対話したヴォルトン氏は、現教皇を「グローバル化時代」のはじめての教皇と呼んでいる。「グローバル化時代」の世界は「武器を製造し、売ることで、人間を金銭という偶像の祭壇に犠牲として捧げている」(二二、二四五頁)。この世界では、銀行が倒産すると恐慌を防ぐためあつという間に大金が注ぎ込まれるにもかかわらず、苦しみにあえいでいる難民たちにはその千分の一も集まらない。

難民・移民忌避の「おばあさんヨーロッパ」 本書で教皇は言う。難民や移民を忌避する態度は、自分たちがかれらのおかげで成り立ってきたことを忘れている証拠だ。わたしたちはみな移住者、みな難民であり、わたしたちの神学は難民の神学である。母となる力を回復し、連帯によって生命を大切にしよう」と教皇は求めている(一二、

しなさい、行きなさい、赦しなさい、そして福音を宣べ伝えなさい」と教皇は言う(八七頁)。

教会の罪と刷新 教会はほんらい祭りと喜びの場である。「司祭は山羊の匂いがする羊飼いでなければならぬ」(五四頁)。それなのに、硬直した聖職者中心主義、信者獲得熱、過剰防衛に陥ってしまう。「教会は民衆、民です。……もしも教会を知りたければ、村に、……病院に、アメリカに行ってみてください。たくさん宣教者たちが、そこで身を粉にして働いています。彼らは真の革命を実行しているのですよ。改宗させるためではありません。……奉仕するためにそこにいます」(二四六頁)。

メルケル首相と教皇フランシスコ 教皇フランシスコが選出されると、メルケル首相はすぐ会見を申し込んだという(アンゲル・メルケル『わたしの信仰』、新教出版社、二〇一八)。教皇もメルケル首相を「ヨーロッパの偉大な

一五六頁など)。教皇はまだ絶望していないようだ。「わたしは夢見ています、若々しいヨーロッパを」と述べている(二五〇頁以下)。

橋を架けること 現代の多くの問題を解決するためには、異なるものどうしに「橋をかけること」が必要だ。それは、ある人が自分自身から抜け出して別の人とつながることであり、誰かの手を握るとき、他人の家を訪ねるとき、相手に謝罪するときである。そもそも神の子イエスが橋となられたのだ(三七頁)。基本は相手を探しに行くことであり、これは謙遜なしにはできない(三六二頁ほか)。

学校教育で正課に取り入れるなどして「対話の文化」を若者たちにも根づかせることが必要である。「誰一人排除することのない、公正で、過去をしっかりと記憶する社会の建設」を目指さなければならない。若者には「危険を冒し指導者」と呼んでいる(一三七頁)。今日、メルケル首相と教皇フランシスコの影響力は大きい。

「はじめて」が多い教皇 教皇フランシスコは、ヨーロッパ出身でないのはじめての教皇であるし、フランシスコという名前も、イエズス会員であることも、「はじめて」が多い教皇だ。南米は「解放の神学」を生んだ地域であり、フランシスコは生涯貧しさを選り自然を愛した。またイエズス会は教会の最前線に派遣されることを望む修道会である。実際、現教皇は、旅行で立ち寄る司祭のための宿泊施設に寝泊まりしているし、どの所持品も非常に質素である。

本書は教会やキリスト者が人々によりそって歩むよう暖かい言葉で励ましてくれるだろう。

(やまおか・さんじ)上智大学名誉教授
(四六判・四二二頁・本体二六〇〇円+税・新教出版社)